

住区内道路における子どもの道遊びに対する意識

福岡大学工学部社会デザイン工学科 辰巳 浩，吉城 秀治，堤 香代子，糸永 匠汰

1. はじめに

子どもにとっては、公園や空き地は勿論のこと、例えばそこに行くまでの道でさえ遊びの場になり得る。住区では子どもの道遊びが起こり得ることを前提としたみちづくりが必要なものと考えられ、実際に海外ではボンエルフ等の交通静穏化策により子どもに優しいみちづくりが進められている(写真1)。

一方で、我が国においてもこれまでの交通安全対策等により交通事故件数自体は減少傾向にあるものの、子どもを持つ親の交通事故に対する不安意識は高い。自由に外遊びができる環境が身近にあることによる発育への効果は明らかにされてはいるものの、実情としては安心して外遊びをさせづらい状況にある。また、かつては当たり前のようにみられた子どもの道遊びは現在必ずしも容認されるものではなく、地域におけるトラブルとなっている事例も散見される。交通安全対策を進める上で合意形成が困難な場合もある中、これらの道遊びに関わる現状を鑑みれば、子どもの道遊びの実態を踏まえつつ、その保護者や地域住民との折り合いのもと、子どもの安全を確保するための交通安全対策を展開していく必要がある。

そこで本研究では、道遊びを行う子ども、その保護者、地域住民それぞれの住区内道路における道遊びに対する意識について明らかにしていくことを目的としている。ここでは子どもの道遊びの実態と保護者と地域住民の安心・容認意識について明らかにするものである。

2. 調査概要

本研究では、まず小学生の子どもをもつ保護者を抽出し、保護者の立場として小学生の子どもの道遊びに対する意識を尋ねた。そしてその保護者を通じて、小学生の子どもの道遊びの状況を聞き取ってもらうことで、小学生の回答を得ている。一方で、家庭に小学生の子どもがいない回答者を地域住民とした。

なお、回答者は戸建てに住んでいること、小学生については公園や道路で外遊びをしていること、地域住民については実際に自宅前や周辺で子どもの道遊びを見かけることがあることを条件にスクリーニングを行っている。

アンケートはWebアンケートで実施し、概要を表1に示す。なお、用いたデータは有効サンプルの844件を用いた。

3. 道遊びに関わる意識の実態

(1) 子どもの道遊びの実態

子どもの道遊びの実態について明らかにしていく。道路で遊ぶことのある子どもについては道路上で遊ぶときのことを、道路上で遊ぶことのない子どもには公園等での普段の外遊びの状況について尋ねた。まず、どのような遊びをしているかについて尋ねた結果を図1に示す。おにごっこやかくれんぼなどについては道路上以外の割合が高くなっている。一方でスケボー・ウェイクボードやローラースケートについては道路上の割合が高くなっていた。

走り回るような遊びは公園等で、アスファルト舗装の道路上のほうが走りやすい遊びについては道路上で行われやすい傾向にあることがわかる。また、なわとびやボールの壁当てなど、一人でも取り組めるような遊びも道路上で発生しやすい傾向にある。実際にそれぞれの場所での遊び相手について尋ねた結果においても(図2)、道路上では自分ひとりで遊ぶ割合が高いことが示されている。他にもすぐ近所に住んでいる友達や兄弟姉妹、両親の割合が高いことも示されており、身近に遊び相手がいるような場合にも道路上での遊びが選択されていることがわかる。

そして、実際にどのような道路でどのような遊びが発生しているのかを理解するために、まず自宅前の道路について最も当てはまる道路の特徴を保護者に選択してもらった。その道路の種類を表2に示す。そして、その自宅前の道路に加えて、自宅周辺の道路で遊びを行っている状況についても尋ねており、その結果を図3に示す。図3より、自宅前道路においてはどの遊びの割合も高くなっている一方、自宅前道路以外の周辺道路になるとどのようなタイプの道路であってもその割合は低くなっている。自宅前か否かが遊びの発生に大きく関わっているといえる。

(2) 小学生の子どもを持つ保護者の意識と地域住民の意識

小学生を持つ保護者に対して道路上で子どもたちが遊ぶことに対するの安心意識、地域住民については容認意識を尋ねた。その結果を図4に示す。保護者は子どもの道路上での遊びに対しては不安の割合が高いが、子どもが道遊びをしていることによるトラブルについては約80%の人が経験がないとの回答であった。

地域住民に対して尋ねた道路上で子どもたちが遊ぶことに対する容認意識では、容認の割合が高くなっている。しかし、道遊びをしていることによるトラブルについては約75%の人が経験があるとの回答であった。

4. 子どもの道遊びに対する保護者と地域住民の意識

保護者の安心意識に関わる要因について分析を進める。保護者に対しても図3と同様、各道路において子どもがそれぞれの道遊びを行うことに対する安心意識について尋ねた。それぞれ4種の遊びを目的変数とし、道路種類等を説明変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った結果を表3に示す。どの結果をみても遊び場所が有意な変数となっており、標準偏回帰係数が最も高くなっている。よって、自宅前かどうか特に保護者の安心意識に関わっているといえる。実際に、安心と感じる確率を表3の結果から算出してみれば、例えば日没前の自宅前の道路でかつその道路がタイプⅢの細街路通過交通なしであった場合、その場遊びをしている子どもに対しては安心に感じる確率は86%となる。一方、これが自宅前でなく周辺になれば25%に低下する(図5)。

次に、地域住民の容認意識に関わる要因について分析を進める。地域住民に対しても図3と同様に、各道路における子どもがそれぞれの道遊びを行うことに対する容認意識について尋ねた。それぞれ4種の遊びを目的変数とし、道路種類等を説明変数とした保護者同様に二項ロジスティック回帰分析を行った結果を表4に示す。どの結果をみても、時間帯が有意な変数となっており標準偏回帰係数が高くなっているなど、時間帯が日没前かどうか特に地域住民の容認意識に関わっているといえる。実際に、容認と感じる確率を表4の結果から算出してみれば、例えば日没前の自宅前の道路でかつその道路がタイプⅢの細街路通過交通なしであった場合、その場遊びをしている子どもに対しては容認とを感じる確率は64%となる。一方、これが日没後になれば30%まで低下する(図5)。

表3 それぞれの遊びに対する保護者の安心意識								
変数	その場での遊び				かけっこ遊び			
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	P値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	P値
時間帯(日没前、日没後)	1.204	0.237	3.33	0.000	1.174	0.228	3.23	0.000
遊び場所(自宅前、周辺)	2.895	0.456	18.09	0.000	2.493	0.387	12.09	0.000
細街路(交通なし)	1.494	0.256	4.45	0.000	1.141	0.193	3.13	0.000
細街路(交通あり)	0.646	0.111	1.91	0.006	0.303	0.051	1.35	0.229
補助幹線道路	0.532	0.094	1.70	0.023	0.368	0.064	1.44	0.134
定数	-3.785			0.000	-3.852			0.000

変数	乗り物遊び				ボール遊び		
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	P値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比
時間帯(日没前、日没後)	1.115	0.214	3.05	0.000	0.765	0.147	2.15
遊び場所(自宅前、周辺)	2.359	0.362	10.58	0.000	2.627	0.403	13.83
細街路(交通なし)	1.206	0.202	3.34	0.000	1.055	0.176	2.87
細街路(交通あり)	0.698	0.116	2.01	0.005	0.264	0.044	1.30
補助幹線道路	0.376	0.064	1.46	0.133	0.307	0.053	1.36
定数	-3.859			0.000	-3.945		0.000

表4 それぞれの遊びに対する地域住民の容認意識								
変数	その場での遊び				かけっこ遊び			
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値
時間帯(日没前、日没後)	1.403	0.295	4.07	0.000	1.416	0.270	4.12	0.000
道路位置(自宅前、周辺)	1.035	0.174	2.82	0.000	0.917	0.140	2.50	0.000
細街路(交通なし)	1.075	0.192	2.93	0.000	1.188	0.192	3.28	0.000
細街路(交通あり)	0.640	0.118	1.90	0.000	0.764	0.127	2.15	0.000
補助幹線道路	0.315	0.059	1.37	0.035	0.210	0.036	1.23	0.235
定数	-2.349			0.000	-2.950			0.000

変数	乗り物遊び				ボール遊び		
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比
時間帯(日没前、日没後)	1.314	0.226	3.72	0.000	1.353	0.221	3.87
道路位置(自宅前、周辺)	0.685	0.094	1.98	0.000	0.821	0.107	2.27
細街路(交通なし)	1.280	0.187	3.60	0.000	1.205	0.167	3.34
細街路(交通あり)	0.796	0.120	2.22	0.000	0.702	0.100	2.02
補助幹線道路	0.335	0.052	1.40	0.110	0.200	0.029	1.22
定数	-3.385			0.000	-3.556		0.000



写真1 スイスにおけるボンエルフ

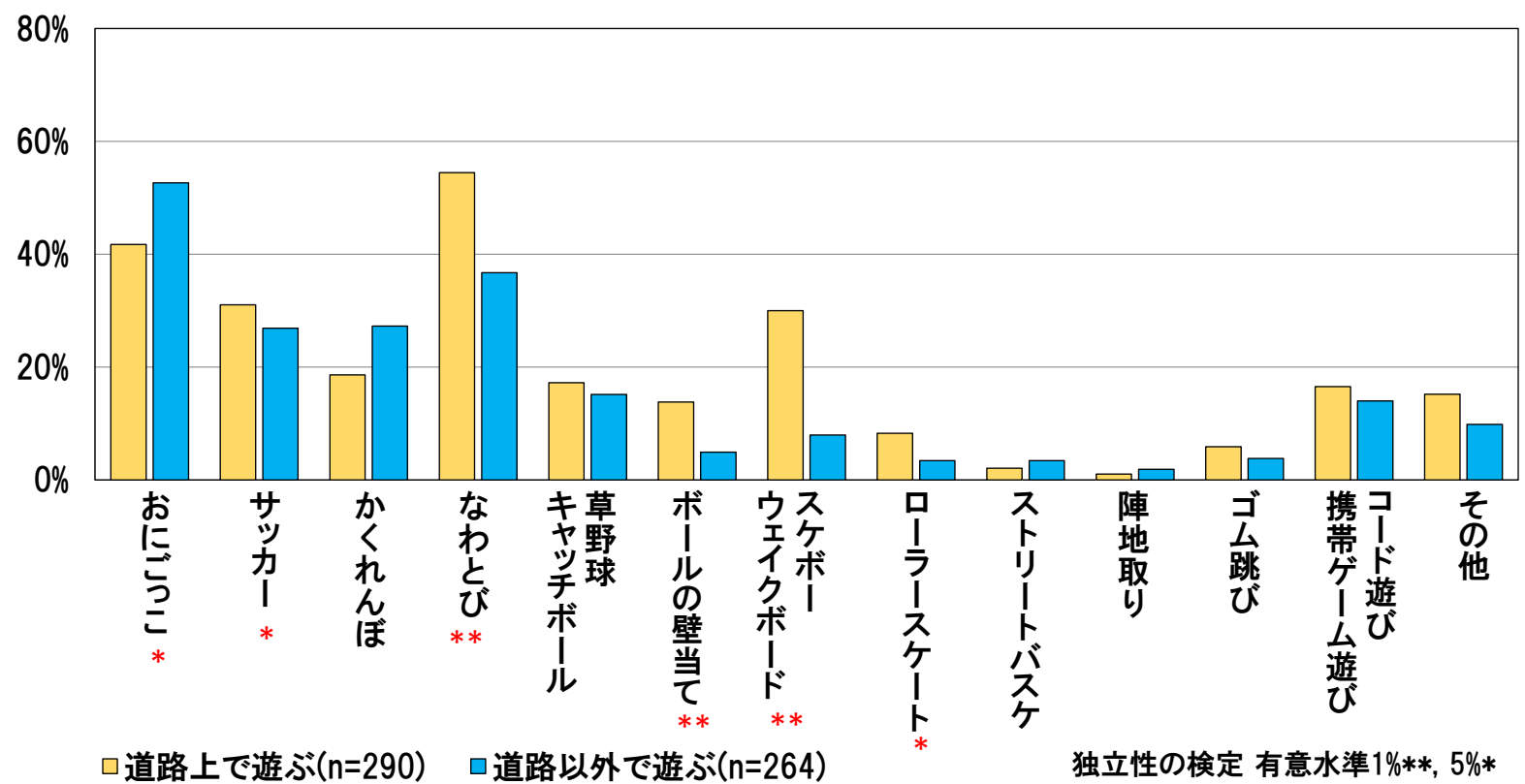


図1 道路上とそれ以外の場所での遊び内容

表1 アンケート調査の概要	
調査期間	2018年11月末
配布・回収方法	楽天インサイトによるWebアンケート
回収サンプル	900(うち有効サンプル:844)
調査対象	・全国の小学生およびその保護者(600) ・小学生の子どもを持たない成人(300)
主な調査項目	・個人属性 ・道遊びの現状について ・保護者の道遊びに対する安心意識 ・地域住民の道遊びに対する容認意識

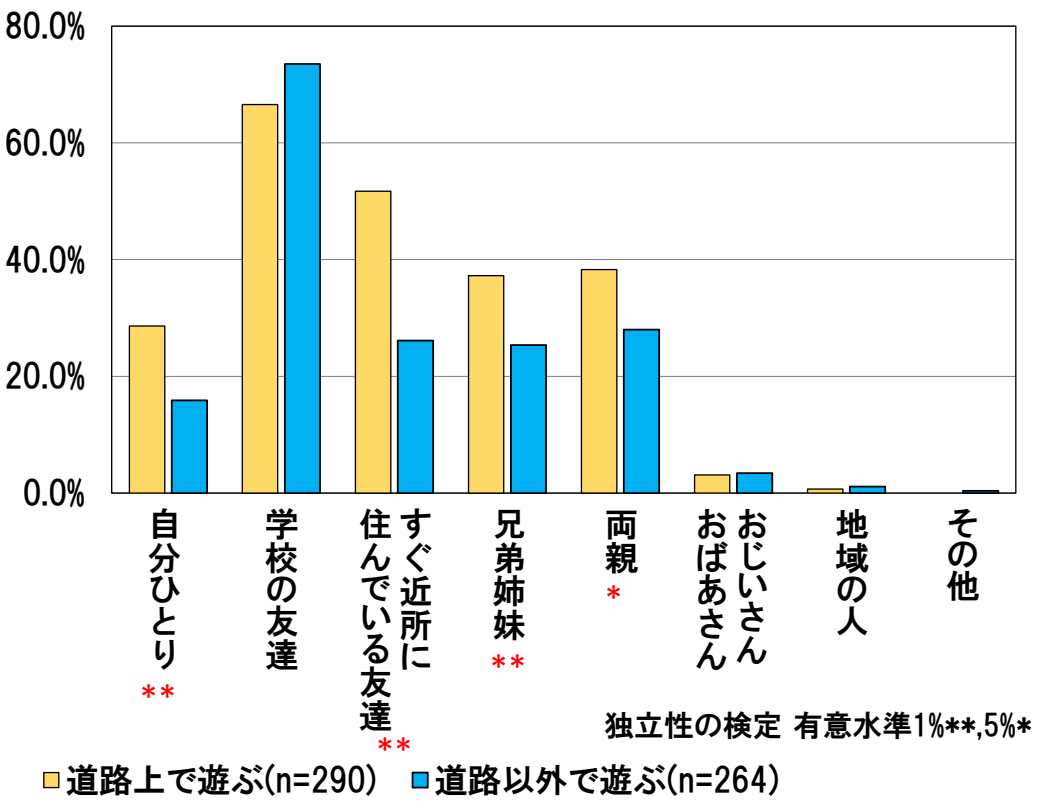


図2 道路上とそれ以外の場所での遊び相手

表2 道遊びのアンケートに用いた道路の種類

細街路通過交通なし タイプⅢ	ゾーンの末端で各住戸に対するサービス機能を有する道路 但し、道路ネットワーク上、通過交通は発生し得ない
細街路通過交通あり タイプⅢ	ゾーンの末端で各住戸に対するサービス機能を有する道路 但し、道路ネットワーク上、通過交通は発生し得る
住区内補助幹線道路 タイプⅡ	ゾーン内の交通をタイプⅠに導くとともに、各住戸に対するサービス機能を持つ道路
住区内幹線道路 タイプⅠ	ゾーン内の発生・集中交通量を外周道路へ導くゾーンの骨格道路

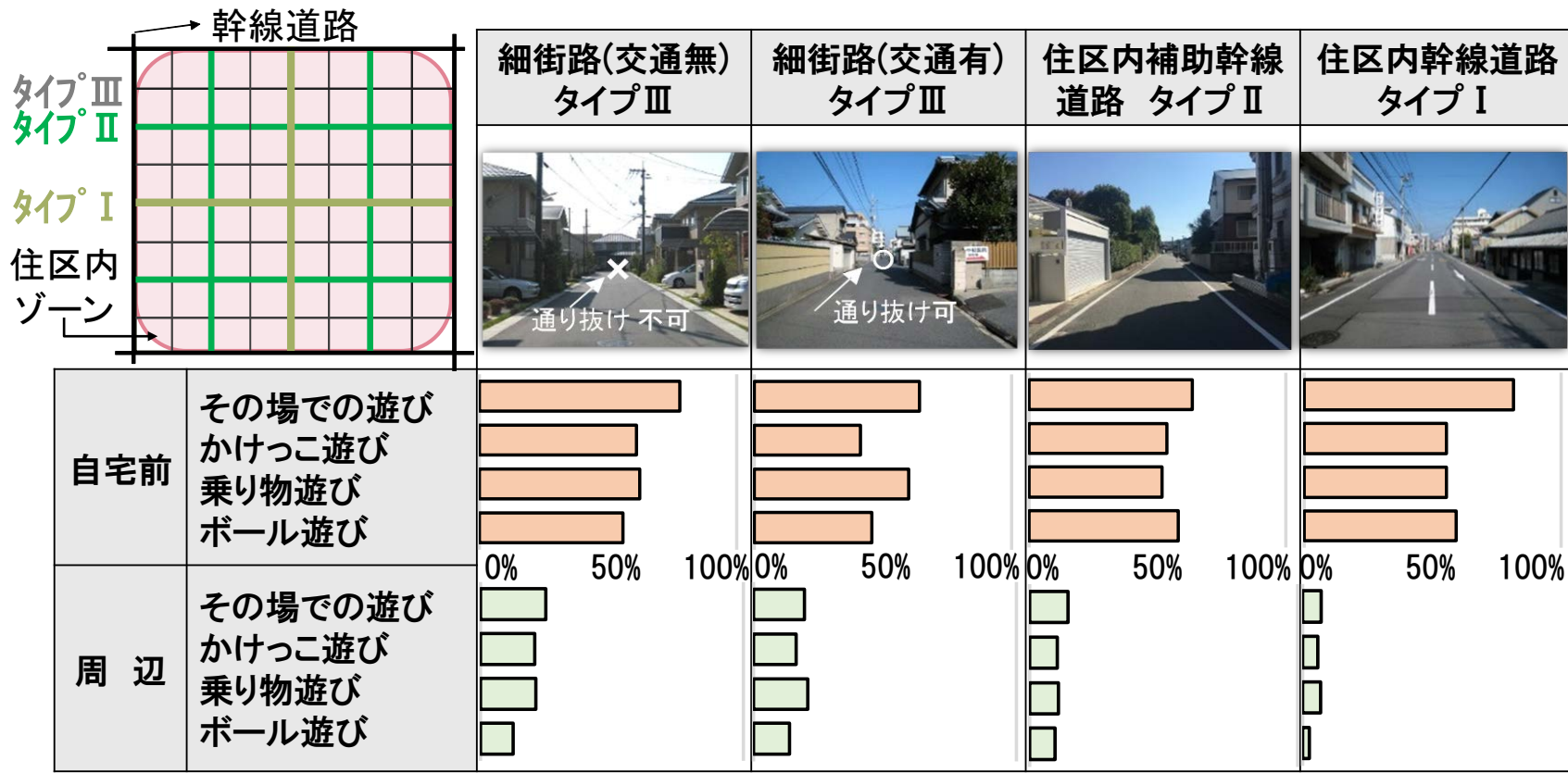


図3 道路種類別の各遊びの実施状況

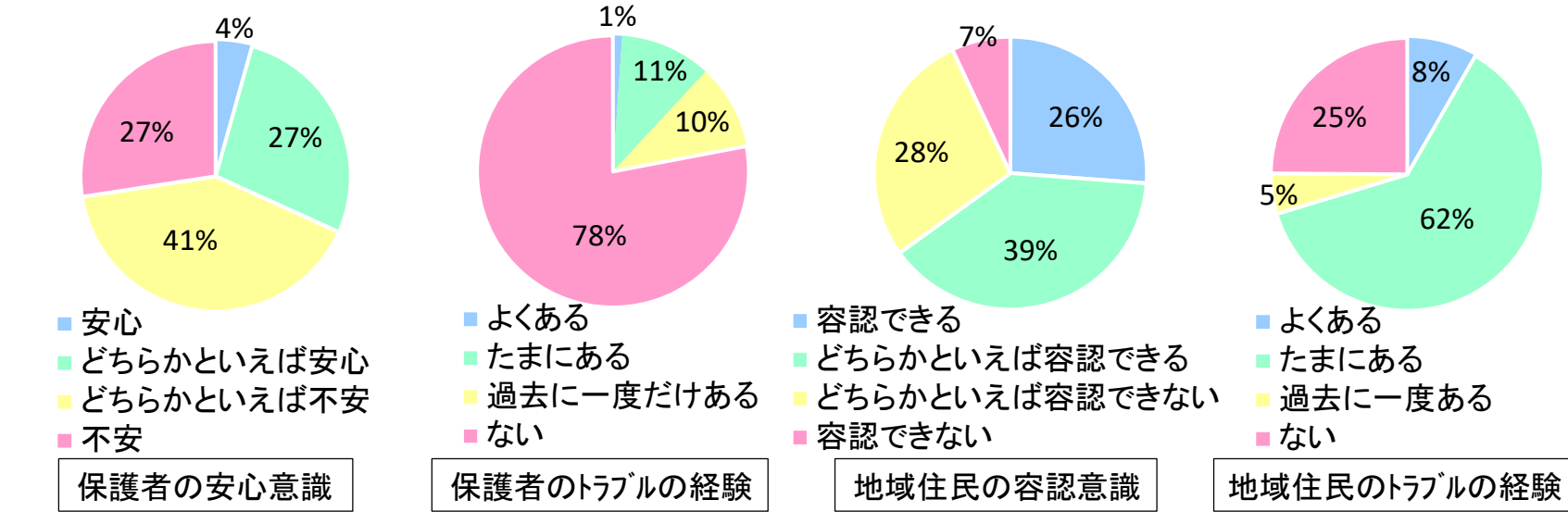
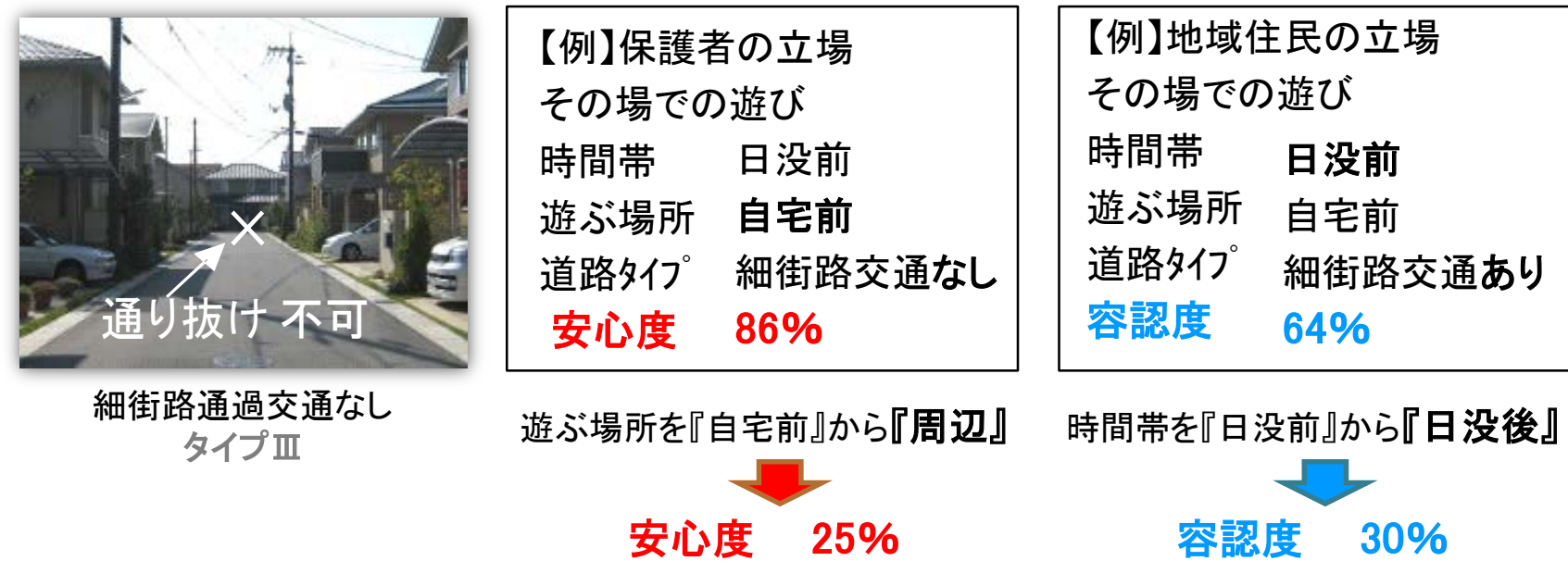


図4 保護者の立場と地域住民の立場の意識



5. まとめ

本研究ではWEBアンケートを元に子どもの道遊びの現状、保護者の道遊びに対する安心意識、地域住民の容認意識について求めてきた。二項ロジスティック回帰分析を行い、安心とを感じる確率、容認とを感じる確率を実際に算出し数値化した。そして、その結果から地域住民の合意が得られつつ、子どもの安全と保護者の安心が確保される道路環境のための交通安全対策ゾーンの提案として図6と表5に示す。子どもと保護者に関して、子どもは自宅前であれば日没前全ての道路で遊びが発生することがわかり、保護者に関しては細街路(交通なし)以外はやはり不安意識が高いので表5の左側の結果となる。よって、子どもと保護者では図6の上段に示すように住区内幹線道路での交通安全対策が必要であるといえる。

それに加え地域住民の意識を反映したものが表5の右側である。地域住民に関しては自宅前、日没前の条件で保護者同様に容認数値を算出したところ非常に低かったため、その場での遊びとかけっこ遊びに関してのみは細街路までが容認できる道路のゾーン範囲であることが分かった。よって図6の下段に示すように、地域住民の合意が得られつつ、子どもの安全と保護者の安心が確保される道路環境のための交通安全対策ゾーンは、細街路からの交通安全対策が必要であると考えられる。

